

蛙

林芙美子

青空文庫

暗い晩で風が吹いていました。より江はふと机から頭をもちあげて硝子戸ガラスどへ顔をくつつけてみました。暗くて、ざわざわ木がゆれているきりで、何だか淋しい晩でした。ときどき西の空で白いような稲いなびか光りがしています。こんな暗い晩は、きつとお月様が御病気なのだろうと、より江は兄さんのいる店の間まへ行ってみました。兄さんは帳場の机で宿題の絵を描かいていました。

「まだ、おツかさん戻らないの？」

「ああまだだよ。」

「自転車に乗っていったんでしよう？」

「ああ自転車に乗って行ったよ。提灯ちようちんつけて行ったよ。」

より江たちのお母さんは村でたった一人の産婆さんさんばでした。より江はつまらなそうに、店先へ出て、店に並べてある箆せいろや鍋なべや、馬穴ばけつなどを、ひいふうみいよおと数えてみました。戸外では、いつか雨が降り出して、湿った軒燈けんとうに霧のような水しぶきがしていました。兄さんは土間へ降りて硝子戸を閉め、カナキンのカアテンを引きました。より江はさつきから土間の隅すみにある桶おけのところを見ていました。

「健ちゃんけん！ 蛙かえるがいるよ。」

「蛙？ どちら、どこにいる？」

「ほら、その桶のそばにつくばっているよ。」

「ああ、青蛙あおがえるだね。何で這入はいって来たのかねえ——こら！

青蛙、なにしに来た？」

より江は怖いので、兄さんの後にくつついていました。青蛙はきよとんとした眼玉をして、ひくひく胸をふくらませています。ぼんぼんぼん、店の時計が八時を打ちました。より江は時計をみあげて、お母さんはどこまで行ったのかしらと怒ってしまいました。より江は淋しいので、兄さんが大事にしているハモウニ力を借して貰って、一人で出鱈目に吹いて遊びました。小学校六年生の健ちゃんとはときどき机から顔をあげて、

「よりちゃん、ハモウニ力に唾を溜めちや厭だよ。」

といいました。より江はハモウニ力を灯に透かしてみました。

沢山窓があるので、小さいより江は、すぐ汽車の事を考え出して、

ハモウニカを算盤そろばんの上へ置いて「汽車ごっこ」とひとり遊びました。より江が板の間の方までハモウニカの汽車を走らせていると、戸外で、

「今晚、今晚、今晚！」

という声がします。

兄にいさんの健ちゃんはびっくりした顔をして「誰だれかね。」と大きい声で返事をしました。すると、表の硝子戸あを開けて、見たこともない一人の男のひとが這入はいって来て、

「腹が痛いのだが薬を売ってくれないかね。」
 といいました。

健ちゃんは、煤すすけた天てんじょう井しようから薬くすりぶくろ袋を降して見知らぬ男

のひとのところへ持つてゆきました。男のひとは大変疲れていると見えて、土間へ這入つて来ると、すぐ板の間へ腰をかけて「ああ」と深いためいきをしました。

「誰もいないのかい？」

とその男は健ちゃんに訊ききました。

健ちゃんは泣なきそうな顔をして、「うん」と云いました。雨が強くなったのでしよう硝子戸がびりびりふるえています。その男のひとは健ちゃんから水を一杯もらつて銭ぜにを置いて帰りました。帰りしなに乗合い自動車はもうないだらうかととききました。

「九時まであります。」

と健ちゃんが応こたえると、その男のひとは硝子戸を丁寧に閉めて

雨の中へ出て行きました。より江は、ギアと云う雨の音をきくと、いまのおじさんは濡れて可愛そうだとおもい、

「傘を借してあげればいいに……」

と兄さんにいいました。兄さんは壁にあつた傘を取つて、硝子戸をあけ「おうい」といまの男のひとを呼びました。男のひとは二三十歩行つていましたが、健ちゃんが雨の中を走つて傘を持つて来てくれると、びっくりするほど健ちゃんの肩を叩いて男のひとはよろこびました。——より江たちのお母さんは九時頃帰つて来ました。

健ちゃんたちが、さつきの男のひとの話をすると、お母さんは心配そうに「ほう」といっていました。濡れた自転車を土間へ入

れて健ちゃんが硝子戸に鍵かぎをかけようとすると、さつきの蛙がまだつくばっています。

「よりちゃん、まだ蛙がいるよ。」

と、健ちゃんが蛙をつまみあげると、薄青い色をした蛙は、くの字になった両脚りょうあしを強く曲げて逃げようとなりました。健ちゃんは空箱あきばこの小さいのへ蛙を入れて、寢床へはいったより江の枕まくらもと元へ持つて行つてやりました。

より江はその箱を耳につけて、いつとき、ごそごそという蛙のけたのはいを愉しんでいました。

お母さんは、まだ何かお仕事のようでしたが、より江は箱を持つたまま小さい躰いびきをたてて眠り始めました。

あくあさ
翌る朝。

夜来やらいの雨が霽はれて、いいお天気でした。健ちゃんけんちゃんは学校へ行き
ました。より江は蛙かがいなくなつたと騒いでいました。戸外では、
まぶしい程ほどあさひ朝陽あさひがあたつて、青葉は燃えるように光つていました。
より江が庭でほうせん花かの赤い花をとつて遊かんでいると、店の土
間で自転車かあを洗つていたお母さんが、

「よりちゃんや！ よりちゃん一寸ちよつとおいで。」
と呼びました。

より江は何かしらとおもつて走つてゆきますと、昨夜ゆうべのおじさ
んが、バナナの籠かごをさげて板の間へ腰をかけていました。お母さ
んはにこにこ笑わらつて、

「わたしは、まあ、心のうちで泥棒じゃなかったかしらなんて考えていましたんですよ。」

と聞いていました。

おじさんは、新らしく来たこの県の林野局のお役人で、山から降りしなに徑みちに迷ってしまつて、雨で冷えこんで、腹を悪くしたと聞いていました。

「ほんとに、薬を飲んだときはやれやれとおもいましたよ。これはお土産みやげですよ。」

そういつて、紐ひもでくくつた傘かさとバナナの籠かごを土間に置いて、より江の頭をなせてくれました。より江はおじさんが、如何いかにもうれしそうに声をたてて笑う皓しろい歯をみていました。お母さんは自

転車を洗い終ると、店先きの陽向ひなたに干して、おじさんに茶を入れて出しました。

「おや、雨蛙がいるよ。」

おじさんがひよいと股またをひろげると、おじさんの長靴ながぐつの後にうしろ昨夜ゆうべの雨蛙が呆ぼんやりした眼をしてきよとんとしています。より江は雨蛙をどこか水のあるところへ放してやろうとおもいました。そつと両手で挟はさんで、往来の窪くぼみへ置いてやりましたが、蛙は疲れているのか、道ばたに呆ぼんやりつくばったままです。より江はひしやくに水を汲くんでぱさりと、蛙の背中に水をかけてやりました。蛙はびっくりして、長く脚を伸ばして二三度飛びはねてゆきましたが、より江がまばたきしている間まに、どこかへ隠

れてしまったのか煙のように藪垣やぶがきの方へ消えて行ってしまった。

乗合自動車がが地響ををたてて上がって来ました。おじさんは、

「さアて、山へ行くかな……」

そう云って立ちあがりますと、より江のお母さんは、赤い旗を持って土間へ降りてゆきました。より江もひしゃくを持ったままお母さんの後あとへついて、表の陽向ひなたへ出て行きゆました。

青空文庫情報

底本：「赤い鳥傑作集」新潮文庫、新潮社

1955（昭和30）年6月25日発行

1974（昭和49）年9月10日29刷改版

1989（平成元）年10月15日48刷

底本の親本：「雑誌『赤い鳥』復刻版」日本近代文学館

1968（昭和43）年-1969（昭和44）年

初出：「赤い鳥 8月号（終刊号）」

1936（昭和11）年8月

入力：林 幸雄

校正：もりみつじゅんじ

2002年1月3日公開

2005年9月25日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

蛙

林芙美子

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>